

ともに生きるために

森山新（お茶の水女子大）

第11回となる今回のセミナーのテーマは「日韓、東アジアがともに生きるために」であった。昨年は戦後70年、日韓国交回復50年の節目の年にあつて、政治では解決できない様々なテーマについて、日韓両国の学生たちが率直に意見を交換しながら共同声明を発表した。今回はその成功を踏まえ、ともに生きるための未来に向けての対話を開始した。

扱われたテーマは「共生のための街づくり」「歴史教育と共通教科書」「日韓の未来と文化」「交流の促進による日韓共生」「日韓共通の課題としての女性の社会進出」であった。対立の原因となっていた過去をいかに克服し、共同の声明を行うかが昨年の大きな課題であったが、今年は、対立という現状を共生へと転換していくにはどうしたらいいかという点について、話し合いが持たれた。事前のテレビ会議システムでの交流と、代々木、草津での合宿を通じて育まれた友情の絆を基盤としながら、日韓両国の学生たちが納得できるような具体的な方案を模索し、提示された最終発表は、教員の我々からしても学ぶべき点が多く、学生たちがこのような対話と協働を続けていくことで、日韓の共生の道は拓かれると確信している。

また、今年は、各イベントの担当を決めるだけでなく、学生代表を日韓双方から立て、進行のほぼ全てを学生の手に乗せた。学生に進行を委ねることで、セミナー自体を自らのものと捉え、その成功を能動的に捉えるきっかけとなる。さらに、国際イベント開催の成功体験は、必ずや将来、国際的な協働作業を行う際の自信となる。実際に行ってみると、学生たちは主体的に動き、工夫を凝らし、独創的かつ学生が目線での有効な運営を実施しており、主導権を学生に委ねるという選択が正しかったことを痛感した。

さらに昨年に引き続き、日本の学生には第一次発表を韓国語で行ってもらった。これは、ヨーロッパが共生の道を歩むに際し行き着いた、複言語主義（plurilingualism）という理念とも合致するものである。お互いがお互いの言語を学ぶことは、対話のチャンネルを増やし、コミュニケーションを促進するのみならず、自己中心、自文化中心の見方やナショナルアイデンティティを克服して、インターナショナルなアイデンティティ形成につながるというものである。実際に外国語を学ぶことの困難を日本の学生が共有することで、日本語能力が完全とは言えない中、日本語で対話を行う韓国学生への立場に対する感謝と敬意が生まれ、言葉の壁を両側から崩し、対話していく土台が築かれていったと思う。また学んだ言語を用いながら政治、歴史などの問題を扱うことも、政治や歴史認識に潜む自国中心の視点に気づき、克服することにつながり、国や文化を超えたシティズンシップ（intercultural citizenship）の育成につながったのではないかと確信している。

最近、世界ではテロの多発、ヨーロッパへの移民の流入、英国のEU離脱、アメリカ大統領選へのトランプ候補の台頭など、「ともに生きる」とは逆行するような事件が相次いで発生している。東アジアにおいても、領土・領海の問題、慰安婦の問題などで対立の構図は今も残っている。このような試練を乗り越え未来を担うべき若者が、共生の道を模索し、共同発表を行うことは大きな意味があると言える。

最近、女性リーダーがいたところで誕生しているが、日韓両国を代表する女子大学の学生が居場所を共有しながら勝ち取った成功体験は、必ずや女性リーダー育成へとつながり、対立多き今日の社会を良き方向へと導いてくれると信じている。

最後になったが、本セミナーの成功にご尽力いただいた、同徳女子大学の日本語学科の金ユン先生をはじめとした諸先生方、お茶の水女子大学のグローバル教育センター、グローバル文化学環の諸先生方やスタッフの皆さんに心から感謝の意を表したい。